

学術 回心 想心

前田泰樹・水川喜文・岡田光弘編

ワードマップ

エスノメソドロロジー

人びとの実践から学ぶ

エスノメソドロロジー(以下EMを敬遠していた読者も下EMと略す)の第二世代本書を通してEMに再入門とも言えるべき紹介書がようやく出版された。私も含め、本書は、第一部エスノメ「第一世代」は、この本の編者たちが指摘するように、また社会学の方に軸足を論理、第三部エスノメソドロロジーの記述となっており、創始者であるガーフィンの最初の問いかけから始まって、EMの基本的な概念の説明、秩序の成立に対するEM独自の説明論理、そして、秩序を産出するメンバーの実践の記述という流れになっている。

まず、初学者向けには、本書は非常にわかりやすい好著である。というのも、本書の全般を通して概念の統一がとれており、さらに強調が明示された文体とい、本全体の構成とい、巻末のFAQとい、執筆者たちの編集の努力がうかがえる。特に評価すべき点は、従来定訳となっていた概念が、平易に訳し直されている点である。これまでに難解な訳語に悩まされ

り、それに対してクレームをつけたら、我慢したりしながら、他の列の参加者とともに協同で当該の順番待ちの列を構築しているのである。つまり「EMは、社会学の問題を、社会学理論の問題である前に実践に参加している人々にとつての課題である」と考え、場面で

「本書、74頁」ことが重要であると述べる。これは会話分析も含めて、EMの根本的な主張に関わる非常に明快な要約であろう。また、客観的に見れば十分」としか言いようがない病院のカルテが、当該病院スタッフにとっては「最適」なものであることを例証したガーフィンの古典研究を背景としながら、それを現代の電子カルテの導入後の変化と比較したヒースとラフの研究を紹介することによって(第4章)、読者も古典から現在までの研究の道筋をたどれるようになっていく。つまり病院のカルテは、単なる診断記録ではなく、「病院で横行化され価値づけられた実践と分かちがたく結びついている」(本書、79頁)のである。紙幅の関係から、本書のさらに詳しい内容を紹介できないのが残念だが、本書の第三部においては、会話分析の研究成果はもちろん、教育や科学のワークの実践、共同作業やテクノロジーの研究、さらにメディア研究など、EMのさまざまな研究分野が紹介されており、現在のEM研究の裾野の広さが鳥瞰できる。具体的で明快な説明と、カバ

第二世代による優れた入門書

実践の記述としてのエスノメソドロロジー

山田 富 秋

とに秩序の「可視性が与えられ、それを利用して、さらなる秩序が生み出される」(本書、74頁)ことが



あたりまえから学ぶ社会学
46判・318頁・2520円
新曜社
978-4-7885-1062-3

一するトピックの幅広さを両立させた、本書の著者たちのコラボレーションを評価したい。(やまだ・とみあき氏) 松山大学教授・社会学専攻
★また・ひろき氏は東海大学准教授・社会学専攻。一九七二(昭和46)年生。
★みずかわ・よしゆみ氏は北星学園大学教授・社会学専攻。一九六四(昭和39)年生。
★わかた・みつひろ氏は国際基督教大学ほか非常勤講師・社会学専攻。一九六〇(昭和35)年生。